



福井大学教育学部
附属義務教育学校

No. 01

令和4年4月12日

学校だより

探究と多様性

校長 牧田秀昭

新入生や転入教員を加えて、令和4年度の教育活動がスタートしました。私は、北典子前校長から引き継ぎ、附属義務教育学校長、附属幼稚園長を拝命した牧田秀昭です。かつて附属中学校教諭として9年、副校長として3年務めた、最も思い入れの強い学校です。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、令和4年4月1日に、内閣府、総合科学技術・イノベーション会議による「Society5.0の実現に向けた、教育・人材育成に関する政策パッケージ」の最終とりまとめが公開されました。これまでの大量生産、大量消費の社会では同質性や均質性が求められ、一斉授業によって、「みんな一緒に みんな同じペースで みんな同じことを」学習することが推奨されていました。私の世代はまさにそうでした。しかし現在、そしてこれからは新たな価値創造やイノベーション創出に向けて、多様性を重視した教育・人材育成のために、「それぞれのペースで 自分の学びを 対話を通じて」進めることが提起されました。これまではあまりにも「同調圧力」や「正解主義」に支配されすぎていたことを改め、子供の学ぶワクワク感、「好き」や「夢中」を手放さない学びをどう実現していくかを具体的に進めるロードマップも示されました。もちろん学校内だけの問題ではなく社会構造全体を俯瞰しての提案です。

その方策としてクローズアップされているのが、本校が進めているプロジェクト学習等による「探究力」の育成です。義務教育学校は設置6年目を迎えましたが、後期課程の「学年プロジェクト」をベースに、成長段階に応じて全学年で進めている「社会創生プロジェクト」は、子供も教師もその効果を実感しているところです。

さらにこの活動を発展させるためには、「多様性」について、子供も教師も改めて捉え直す必要があると考えます。子供たち一人一人は、素晴らしい可能性を秘めた個性の塊です。互いにそれらを認め合ううえで、多様な「知」を結び付けて、新たな展開を模索します。人と人のつながりだけでなく、最近よく言われている教科横断的な学びや、文理融合などもこれにつながります。困難を抱えている子供理解も同様です。「優か劣か」でなく、「それぞれどんな特長があるか」「どうつなぐと面白いことができそうか」といった「多様性」の追究が、「探究」の質を向上させるのではないかと考えています。



保護者の皆様、今後とも本校の教育活動にご理解ご協力をよろしくお願いいたします。